

## 特集 1968年の序文

今回は特集のひとつとして、一九六八年を取り上げることにした。

というのも、たった今終わったばかりの二十世紀を振り返ってみたとき、そこにはつきりと二つの文化的ピークが存在していたことが歴然とするからである。ひとつは一九二〇年代後半であり、チューリッヒでダダイズムが、ベルリンで表現主義が、ミラノでフトウリスモが、モスクワでは構成主義が、パリでシュルレアリスムの思潮が開き、文学、映画、絵画、音楽といったジャンルを横断しながら、豊かな実験と探求を繰り広げた。それは若干の時差をともなつて日本とアメリカにも到来し、ここに世界的な同時性のもとに文化的前衛が成立することになった。

もうひとつの波は一九六八年の前後に訪れた。この時期には

文化的に実験を行なうことと政治的にラディカルであること、また哲学において根本的な異議申し立てを行なうことが、あたかも三位一体であるかのように歩調をともにしていた。

アメリカでは黒人解放闘争が激化し、ヴェトナム戦争反対を叫ぶ学生たちがキャンパスを包囲した。それはカスターネダがベストセラーとなり、ロックとヒッピーの文化が街角に溢れ、NYで実験的な個人映画が次々と制作されることと、軌を同じくしていた。パリの五月革命は第三映画会やジガ・ヴェルトフ集団の結成と同時期であり、フリーコーやドゥルーズといった現代思想家の活躍の大きな背景となった。この年はレナート・ポツジョリが名著『アヴァンギャルドの理論』を、またハバーマスが『認識と利害関心』を発表した年でもある。パークレーで、パリで、ローマで、メキシコシティで生じた学生たちの叛乱は、

その後の知のあり方をめぐって不可逆的な変換を強いることとなった。

日本ではどうであったか。東京大学では医学部を中心に大学闘争が開始され、全学連が新宿駅を占拠して、機動隊と抗争状態に入った。金嬉老が民族差別に抗議して温泉旅館に籠城し、土方巽が『肉体の叛乱』を踊った。若い写真家たちが「PRO-OCKET」なる集団を結成し、三島由紀夫が「楯の会」を結成した。寺山修司は「書を捨てよ、街に出よう」といつつ、年少者を扇動していた。吉本隆明の『共同幻想論』、稲垣足穂の『少年愛の美学』、つげ義春の『ねじ式』は、いずれもこの年に発表されている。東京もまた、パリやNYとともに、実験と前衛の意識において同時代を生きていたのである。

もつとも世代の昂揚は長くは続かなかつた。二〇年代後半の文化的前衛が三〇年代にはナチズムとスターリニズムによって弾圧され、回収され、解体してゆくように、六〇年代後半の興奮は七〇年代に至るとやがて失調し、到来した大衆消費社会のなかでほどよい文化商品としての位置をあてがわれることになった。テロとリンチ殺人に明け暮れた七〇年代とは、いかなる意味でも「鉛の時代」であり、文化的には服喪の時代であるといえる。もはやいかなる実験も、たちどころにCFの素材として使い捨てられる運命となった。芸術は人生よりも長い、不巧の存在であることをやめ、瞬間的に消費される気晴らし以上のものでなくなってしまうた。

今、ここに一九六八年という一年を特別に切り取って、本号で特集を企てるのは、現在までわれわれを深く犯している文化的状況が何に由来しているかを、世紀の変わり目においてもう一度見据えておきたいと考えたためである。大学の研究所が編集する定期刊行物であるにもかかわらず、多くの方々にアンケートの寄稿をお願いしたのはそのためで、大学のアカデミズムを離れて、できるだけ多様な角度と視座から、この時代についての声と意見を集めておきたいと考えたためである。協力をしてくださった皆様に、感謝の言葉を申し上げたい。本学スタッフによる論文、エッセイは、いかなる条件も定めずに自由に書いていただいた。当時、留学生としてフランスに赴いていた者の時局への感想もあれば、造反教官として活躍していた者の回想も、高校教師として現代思想の探求を続けていた者の探求メモもある。きわめて多様な立場がそこでは表明されている。編集部はそれをけつしてひとつの統一的な立場に纏めることを行なわなかつた。「禁止することを禁止する」という、五月のパリに遺された壁の教えに、いささかでも忠実でいたいと望んだためである。

四方田犬彦